

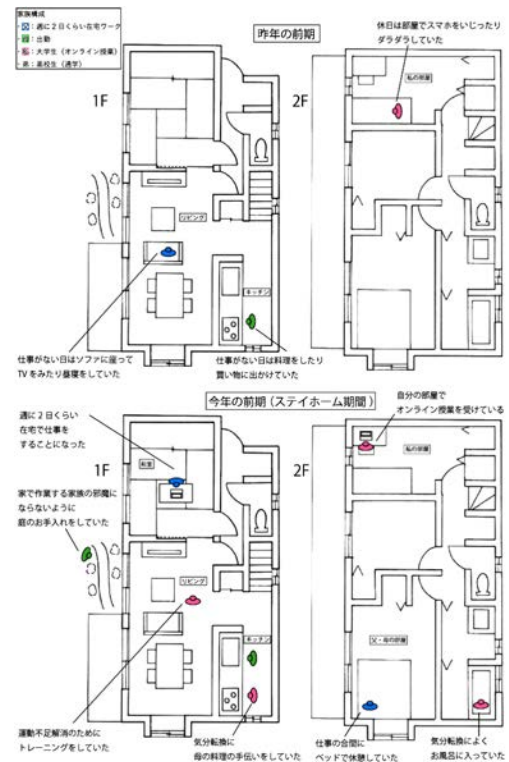
実践女子大学空間デザイン研究室 2020 年度卒業論文

■オンラインで変わる住まいのかたち

2020 年度は新型コロナウイルス拡大による緊急事態宣言を受け、大学はオンライン授業を実施、企業でもテレワークが推奨された。授業や仕事が住宅内に持ち込まれることによる、住まい方の変化を追う。生活環境学科の学生 50 人を対象に、2020 前期 (ステイホーム期間) と 2019 前期における自宅内の生活の様子を、アンケート及び図面調査を行い、データを採取した。

オンライン授業や在宅勤務 (テレワーク) は、パブリック性の強い時空間で、①強制的・一方的で、②空間的・時間的拘束が強く、③家族との共用が難しい、という特徴をもつ。基本的にプライベート性が強く、公私分離型プランの住宅に、異質な要素が侵入することで、さまざまな影響をもたらされていた。

- (1) 公私領域の維持：各人に確保された私領域にオンラインが持ち込まれ、家族の公領域が維持される。大きな混乱はなく、家族のコミュニケーションは維持/増幅される。
- (2) 公私の断絶：私領域のオンライン要素が過剰となり、生活が私領域に限定され、公領域との間に断絶が生じる。
- (3) 私領域の喪失：きょうだいなど私領域を共有していた場合、一人が私領域を独占すると、もう一人の私領域が希薄化する。
- (4) 公領域の喪失：公領域にオンラインが侵入し、一人が公領域を独占/私領域化することで、家族の公領域が喪失する。時には安定した居場所が失う人が発生する場合もある。
- (5) 新たな共存のかたち：オンラインが侵入しても、公/私領域から他者の存在を排除せず、従来の領域の性質を変容しながら共存する。ときには私領域が新たな共領域へと変化することもあり、公私に分離されたプランに新たな可能性を示唆する。



(図 1-1) 図面調査例

(表 2-1) 深谷シネマ概要

■深谷シネマの魅力 ~映画がつなぐ人とまち

酒造跡地を改修して開設された「深谷シネマ」は、コミュニティシネマとして人気が高く、リピーターも多い。館長/スタッフ、利用者にはヒアリング/アンケートを行い、深谷シネマの魅力に迫る。

(1) 地域に根ざした存在

深谷シネマは、地域の歴史的建造物を活用し、新たな「生活街」を形成することを意図している。深谷市民の利用に加え、市外からの利用者も多く、深谷を知るきっかけとなっている。

(2) 映画との出会いの場

上映される映画は、館長が選定したり、利用者アンケートで選ばれたもので、来館者からの評価は高い。ここでしか見られない上質の映画との出会いがある。

(3) コミュニケーションの場

スタッフや館長と顔見知りという利用者も多い。映画監督の舞台挨拶なども行われ、映画にまつわる情報共有、コミュニケーションの場となっている。

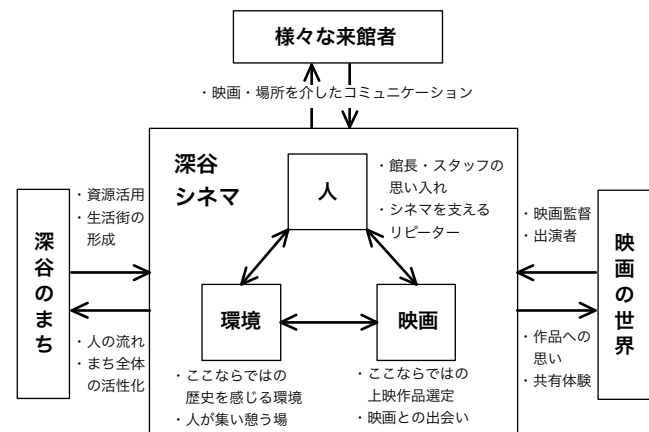
(4) ここならではの環境

酒造跡地の活用により、深谷の歴史に触れることができる。歴史的ならではの落ち着いた雰囲気、穏やかな空気感も、来館者の理由になっている。

深谷シネマは、映画の世界と出会い、様々な人との交流があり、深谷の魅力を再発見する機会を提供する。



所在地：深谷市深谷町  
 運営：NPO 法人シアターエフ  
 開設：2002 年、2010 年移転  
 敷地面積：950 坪  
 建築面積：120 坪  
 座席数：60 席  
 特徴：深谷の歴史的建造物である七ツ梅酒造跡地を活用し、映画館、古書店、雑貨店、飲食店、ギャラリーなどのある「生活街」を形成する。

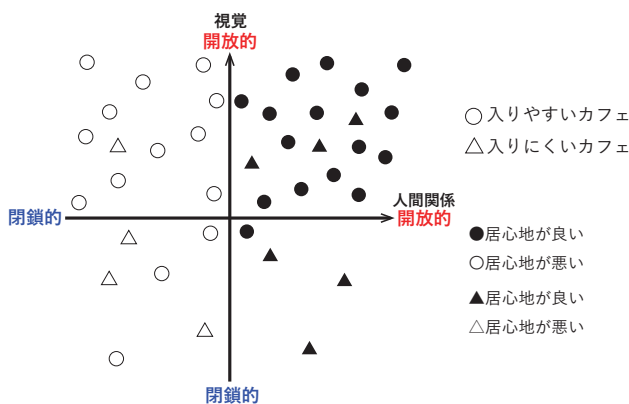


(図 2-2) 深谷シネマを核としたつながり

### ■カフェ空間からみる居方の研究

カフェ空間は、飲食したり会話したりするだけの場ではなく、自宅とは異なるサードプレイスとして、近年ではテレワークの場所として、一人で長時間居座るニーズは高まっていると思われる。カフェの居心地を、物理的環境の質だけでなく、他者との関わりを含む「居方」の視点で捉えていく。雑誌等から40件のカフェを抽出し、実際に一人で訪れて滞在し、室内の特徴、他者の過ごし方などを記録した。

店内への入りやすさは視覚的な開放性が関係するが、店内での居心地については、むしろ居合わせる他者に感じる人間関係の開放性が大きく影響する。他者との距離感や視線の向き、他者の振るまい方に加え、窓から見える景色や空間内の音などが、居心地に関わる要素として抽出された。「居方」は、こうした要素の複合された状態と言える。



(図 3-1) 居心地の良さと視覚的／人間関係の開放性

### ■ドラマからみる場の役割

テレビドラマの中では、さまざまな場所を舞台として、ストーリーが展開しており、それぞれの場所はそのストーリー展開の上で個別の役割を果たしている。とくに、自分の家・部屋などの 1st place、職場や教室などの 2nd place といった生活上不可欠な場所以外の、3rd place として扱える滞在場所を抽出した。交流・楽しさだけでなく、人物の気持ちに「変化」をもたらす場として、その意味を考察する。

ここでは以下の3種類の「変化」を捉えることができた。

- 異なる価値観、他者と出会い、現状から世界を広げようとする<外に向かう変化> = 解放性の場。
- 一人になる、あるいは日常と異なる集団を形成し、内の関係を緊密にする<内に向かう変化> = 凝集性の場。
- 見失っていた自分の出発点を再認識し、自分をリセットするようなく元に戻る変化 = 定点性の場。

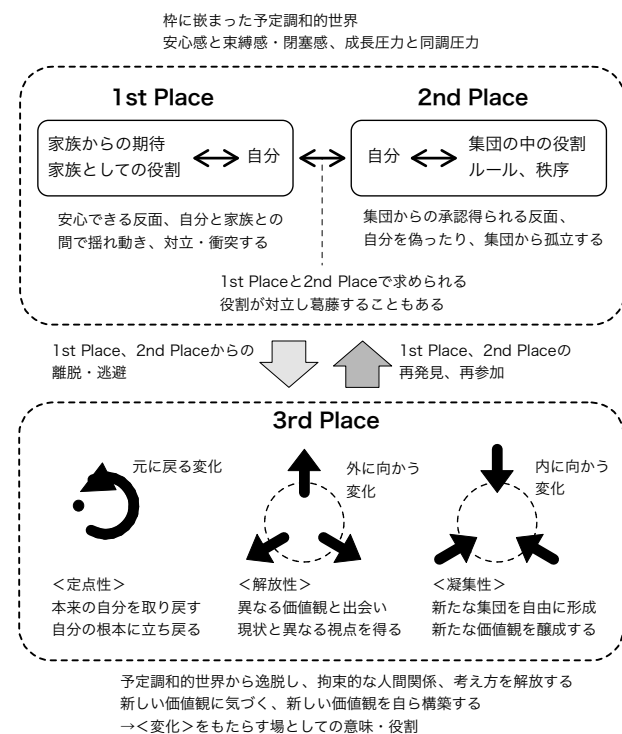
1st Place、2nd Place は、所属欲求を満ちし、安心感を与える場であるが、その一方で人間関係や価値観が閉塞的になり、そこでの同調圧力が求める自分と対立・衝突することがある。そのとき 3rd Place 的場所は、予定調和的世界から離脱し、新たな視点・価値観をもたらす可能性をもつ。それは同時に、1st Place、2nd Place の価値を再発見するきっかけともなる。3つの居場所を行き来することが、物語に広がりをもたせ、登場人物の成長を促している。

人間関係の開放性を感じられ、居心地の良さに繋がると思われる「居方」のパターンを抽出した。カフェという空間の中で、視覚や聴覚を通して繋がるパターン、そこに設えられたモノやスタッフの関わりによってその場を共有している意識が醸造されるパターンなどが見出された。また他者との関係の取り方は、その場で他者を介して伝播し連鎖することもある。

カフェは、一人で訪れても、他人同士が互いの存在を認識し、互いに調整し合いながら「居合わせて」いる。そのような状況が、人との繋がりを感じられ、居心地の良い環境をもたらすのではないかと。

(表 3-1) 居心地の良さに繋がる居方

<p><b>視線で繋がる</b></p> <p>四角のテーブルを緩く囲うように作業をする。他者を感じながら自分の作業に集中ができる。</p>	<p><b>音で繋がる</b></p> <p>背後に人の会話が聞こえる。適度な雑音は心地よい。同じ空間を共有している。</p>
<p><b>モノを介して繋がる</b></p> <p>本をテーマにしたカフェ。席は遠くても目の前の人が同じように本を手を取っている。</p>	<p><b>人を介して繋がる</b></p> <p>本屋側にあるカフェ。本屋側に行くとき、スタッフが挨拶してくれる。それを共有する空間</p>
<p><b>居方の連鎖</b></p> <p>カフェの中央にある対面席。同じ席でも始めに居た人の向きで席の座る向きが自然と決められる。</p>	



(図 4-1) 3rd Place 的場の意味・役割